
鎌鼬{{かまいたち}}

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎌鼬へかまいたち

【ZPDF】

Z6876E

【作者名】

Tomiono

【あらすじ】

最近、とある大学の考古学者が急死した。助手として働いていた俺と古谷は、その博士の研究所を整理しろと言われて、研究室に向かう。しかし、そこにあつたのは、とんでもないものだった・・・。

(前書き)

これも、友達にお題を出され、辞書から適当に選んだキーワードを元に掌編小説を書いてみよう、といつ試みの一つでした。

「これ、何だ？」

と、古い研究室の中で、古谷が俺に向かつて聞いた。研究室は、最近奇妙な亡くなり方をした畠山博士のもんだった。そして、かつて、独立するまでは助手をやつていた俺と古谷が、研究室の整理を頼まれたつてわけだ。研究室は奇妙なもので埋まっていた。奇妙な書類、奇妙な剥製、奇妙な資料。全てに埃が積もつており、息するのもままならなかつた。古谷が手に持つているのは、なにやら奇妙な動物の標本であつた。

俺は、資料の本の一つを叩き、埃を落とした。部屋中に埃が舞つた。

「さあ、なんだろうな」

ここでの研究室を受け持つていた畠山博士は、まあ普通で言つどころのような変人だったので、俺はあまり氣にも留めなかつた。俺たちが助手をしていた頃も、なにやら怪しい研究をしていたし。しかし、少しばその標本が気になり、俺は少ししてから見た。その標本は、まるでいたちのようであつたが、何かが違つた。爪は長く、鋭く、まるで何かを切り裂こうとしているように輝きを放つていた。標本は真新しく、最近作つたものらしい。俺は、標本のケースについていた汚い字で書かれた字を読み取つた。

「か、鎌鼬？」

確かに鎌鼬と書かれていた。

「しかし何故？」

と、俺は独り言を言った。これは面白いジョークか？ 鎌鼬といえば、三匹の妖怪。一匹目が風を起こし、二匹目が肉を切り裂き、三匹目が血が出ない余蘊に薬を塗る。風が吹いて人が傷つく現象を、昔の人達はそうやって説明してきたんだ・・・・。でも、今は科学によつて解説されたんだ。小型の旋風の中心部の真空地帯によ

つて傷は出来るのだ。鎌鼬なんて存在しないはずなんだ……。
。なら、この標本は何だ……？」

「おい、黒川！ 何やつてるんだよ、仕事しろ仕事！ 俺はこの研究所で弟子をしてたつてことの所為で、独立しても就職に何年もかかったんだぞ！ 変人の研究所出身だつて事でな。だから、できることならこんな研究所には一分たりとも居たく無いんだよ……」
と、古谷が研究所の反対側から怒鳴つた。

「そうか、すまんすまん」

俺はそう言つたが、ついその標本の周りにある資料に興味を持つた。
鎌鼬・・・・・。資料には、有り余るほどの情報が、しかも最近のものがあつた。俗に鎌鼬と呼ばれている旋風の中の、肉眼では見えない「実際」の状況の解説入り図解や、神話での鎌鼬の生態。寒冷になる地方の山間部を中心に、ほぼ全国で語られてきたつむじ風の中に潜み、人間を斬る妖怪。両腕が鎌。鎌鼬のほかに、構太刀、飯綱とも呼ばれることがある。傷は軽い切り傷から骨まで見える傷まで、様々らしい。下半身に傷を受けることが多く、鳥山石燕の妖怪絵では高い場所で回転しているものの、主に地面すれすれの場所に発生するらしい・・・・・。

・・・・・などなどと、それまでは俺だつて少しは聞いたことがあつた。しかし、驚きなのは、鎌鼬が実在して、博士は捕獲に成功したという記述だつた。

「何だこれ・・・・・」

と、俺は口から漏らさずにはいられなかつた。

まさか・・・・・？ いやいや、そんなはずがない。大体、言
い伝えでさえ、鎌鼬は疾風の如く現れ消え、捕まえるなど不可能だ
ろ？ 俺は寒氣がした。後ろに振り返つたが、部屋の反対側には口
笛を吹きながら仕事をしている古谷がいるだけであつた。

「何だ、気のせいか・・・・・・」

とつぶやいて、俺はまたノートを見始めた。

気になる記述がもう一つあつた。早く他の二匹を捕まえないと大

変な事になるといつ記述だつた。二匹揃つてこそその鎌鼬、揃わなければ大変なことになる、とノートにはそう書いてあつた。

俺は、ゆつくりと雑記のページをめくつた。俺はぎょつとした。そのページには、真つ赤な血がページ全体にかかつており、下に書いてあつた文章はとても読めたものではなかつた。俺の背筋は、まるで凍つたようだつた。まさか、書いている間に何か博士に起つたとか？

「いやいや、やはりどう考へても非現実的だ」と、俺は自分に言い聞かせるように言つた。

大体、神だか妖怪だかわからないものに襲われるなんて、馬鹿げている。博士も、面白いことを書くなら、人の背筋を凍らせるようなことはしないで欲しい。それにしても、さつきからのこの寒気は何だらう？ 振り返つても何かが居るわけじやなし。だが、不安になつた俺は、標本と資料を古谷に見せにいつた。

「お前、仕事をせがむにこんなものを見てたのかよ！」

「いや、そう言わずに。ちょっと見てよ。この雑記

古谷は俺にせがまれて、いやいや雑記を見始めた。俺と同じじところで混乱した顔をし、鎌鼬の標本を見たりしてた。そして、最後の血のページではぎょつとしたが、

「まあ、博士のことだ、赤インクでもこぼしたんだろう」と言つて済ました。

「なあ、博士の死因つてなんだつたか知つてるか？」

と、俺は恐る恐る聞いた。

「あ・・・・・確か、部屋で無惨に斬り捨てられていたらしくぞ。死体はばらばらになつていて・・・強盗のじわざつて両付けられたがな」

古谷はぎょつとして俺を見た。

「まさか？」

またしてもあの寒気がした。俺は後ろへと振り返つたが、何もいなかつた。

「なあ、黒川・・・・・俺ちょっと大学のキャンパスの方にいつて、これを見せてくるわ。俺は雑記とかその他の資料を持つから、お前は標本を持っていてくれないか?」

ああ
しょ

俺は標本を持ち上げた。見れば見るほど奇妙なものだ。よく見ると
鼈の爪は少し赤みがかかつていて、博士は特別な保存液を使ってい
たから、普通のものじや何百年置いても色なんて絶対にかからない
はずだ。・・・・・いや、待てよ！ 確か博士は鉄には赤みがかか
るといつていたな・・・・・じやあ、この標本の動物の爪には鉄
が！？ だとしたら、本物の鎌鼈か！？

何たか寒氣がするな

古谷はそういう、後ろを振り返った。次の瞬間、何か閃光のような物体が動きがあり、古谷の首は胴から離れ、部屋の反対側の壁へと飛んでいった。血が古谷の首から噴出し、古谷の胴体は崩れ、あたりは朱色で染められた。

動きを止めた閃光は、一匹の鼬のような、ハリネズミのような毛皮を持つた生き物に見えた。俺は何故か、一瞬にしてこの一匹は鎌鼬のもう一匹だと感じた。

氣味が悪い声をあげながら、鎌鼬の一匹は飛び掛ってきたが、さつきよりは断然遅く、俺は部屋を飛び出て廊下を走った。

部屋を出る前に、残りの一匹はまるで力を蓄えるかのように、古谷の死体を切り刻んで食べているのが見えた。走る俺にも構わずに。

「何なんだ、あの様子は・・・・・もはや神などではなく、
としても相当格が低い、ただの人食いだ・・・・・」

三匹揃わないとただの殺人妖怪になるのか？ 確かに、博士はこの標本の一匹を殺してしまつたために切り刻まれたのだし……。

俺は研究室の建物を出て、急いでキャンパスの道を走った。後ろ

で、研究室の棟が崩壊していくのが聞こえた。今日は休みのまつ中最中であり、学生も教員もいなかつた。俺は自分の鼓動が強く強くなるのがわかつた。

「どうするんだ、俺！」

俺はそう咳き、心臓が張り裂けそうになるほど走った。

しばらく走り、俺はとりあえず建物の影に隠れた。標本を握った手は汗ばんでいた。少し静寂があつて、聞こえるのは俺の息だけであつた。気味悪い静かさだつた。

「くそつ、あんなのが街に出て行つたら・・・・・！」

それ以前に、俺はこれからどうすればいいんだ！？

俺はキャンパスの広場を見た。さつきの一匹が飛んできて、匂いですぐに俺の居場所がわかつたらしく、俺の方へと向かつてきました！

「うわっ、来るなあああ！」

俺は叫び、逃げながら思わず標本を投げ捨てた。

標本は鼬の一匹にあたり、その一匹はそのまま落ちて標本の下敷きになつた。標本に当たつた一匹は動かなくなつた。死んでしまつたのだろうか。

最後の一匹は仲間の死体を見て、怒り狂つたかのように俺に向かつて飛んできた。しかし、さつきとは違い、攻撃は一閃だったので、かろうじて最初の一発をかわした。

しかし、飛んだ先はさつき投げ捨てた標本があつた！ 俺は転んだ。

起き上がろうとすると、もうすでに遅く、鎌鼬の手の鎌は、深く深く俺の腿へと突き刺さり、太く温かい筋肉を両断した。鋭い激痛が俺の体中に走つた。

「ぐわあああああああ！」

俺は悲鳴をあげた。痛さのあまり涙が出てきた。

足の傷は出血が酷く、赤い血と肉の合間に骨まで見えていた。真っ赤な血がレンガ敷きの地面を染め上げた。

俺は起き上がれなかつた。

最後の一匹の鎌鼬が、方向を転換し、俺に向かつて飛んできた。
そして、鎌は深く俺の頭に

鎌鼬は、人を殺しても死んだ他の一匹が戻つてくるわけがなく、
ただ永遠に殺戮を繰り返すだけとなつた。残りの一匹は、広場に転
がつた男の無残な死体を後にし、氣味の悪い声をあげながら街のほ
うへと飛んでいった。

(後書き)

お題はホラーで、キーワードは「和名」、「呪ぐ」、「図解」でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6876e/>

鎌鼬{{かまいたち}}

2010年10月11日11時10分発行